

令和四年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国語

(その一)

注意 解答欄は問題用紙の(その六)・(その七)にあります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

少しばかりあたりまえの話をします。私たちが赤ん坊として生まれた時、目の前の全ての物事に名前はありませんでした。意識が発達していくに従い「お母さん」「お父さん」「ごはん」「風」……全てが渾然一体となっていた世界に境目が生まれ我々は一つずつ対象を指す言葉を覚えてきました。

人は社会的な生き物ですから言葉を介して互いにコミュニケーションを取ることで生きていきます。この世界を理解し伝達し合うためのツールとして言葉や単語は、たいてい自分の外側で常につくられて与えられ、それを人々は記憶し使いまわしてきました。ただそれも、技術革新やそれに伴う価値観の変化によって、はやりすたりがあるようです。

今度は少し深い話をしたく思います。さて、言葉はもう一つの方法でも生まれてきたのかもしれませんが。それは沸き起こる感情や気持ちをどうにか相手に伝えるために、自分の内側から生まれてくる言葉です。しかし人間の感情を表す言葉は技術革新のように毎年新しく生まれてきたでしょうか？今もたいてい使うのは「楽しい」「悲しい」……などとても分かりやすい言葉ばかりです。外側で生まれる言葉と内側を表現する言葉の違いはその種類や数にあるかもしれませんが。ただ、使い慣れたはずの内側を表現する言葉、たとえば誰かが「楽しい」と言った時、それを聞いた他の皆が全く同じ「楽しい」に思い至り共有できるわけもなく、言葉を発した本人の「楽しい」でさえその時のありのままの感情を表しきれていても限りません。

人の内側の想いは絶えず揺らぎ変わり続けます。内側で生まれる言葉が少ないのは刹那に移りゆく人の内面の複雑さゆえで、仮にそれを指す言葉を全てつくとすれば海の波の一つ一つに名前をつけるような際限のない作業になってしまいます。その言葉が探り当てられないからこそ人は泣き、叫び、笑い、あらゆる身体的な表現で自分の内側から外側へその感情を表現するのでしょうか。言葉の中にピタリとオサまつてくれる感情など滅多になく、絶えず感情は言葉をはみ出していきます。そのはみ出してしまふ感情をどうにか表現するために音楽や芸術、文学は生まれてきたのではないのでしょうか。

人は生まれながらにして自分の気持ちを言い当てる言葉を常に探している生き物だと私は思うのです。

最後に自分の話をしたいと思います。私が二十三歳でデビューして最初に直面した大きな壁がプロモーションです。雑誌の取材、ラジオ、テレビ、Web、SNS……、あらゆるメディアで自身がつくった作品をセンデンするのですが、いったい何を話したらよいのか全く分かりませんでした。なぜなら、プロモーションの時点では表現したいことは全て音楽の中に込めたと考えていたからです。つまりその作品について言えるのは「聴いてください」だけだったのです。一度音楽として完成された表現を、今度は言語化しろと言われた気がして私はパニックに陥りました。言語化できない思いがあるから音楽を始めたのに、なぜもう一度言葉にしなければならぬのだと悩みながら必死で言葉を探しました。

そしてようやく理解したのは世の中は自分の音楽を知らない人だらけであり、その人たちに少しでも興味を持ってもらうためのプロモーションであり、言葉を工夫して話す必要があるということです。そして大切なのは必ずしも音楽自体を説明する必要はないということです。

令和四年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国語

(その二)

メディアによって求められている言葉も違うので、一分で話す場合と二時間近くインタビューを受ける場合とでは当然ながら語る内容も違ってきます。プロモーションの意義は感じつつも巧みに対応するのは難しいもので、あの当時の私はあまりに生真面目に音楽が生まれたプロセスや想いを言語化しようと試み、それが出来ない自分に落胆して疲弊もしました。ただ、時間と経験を重ねるうちに気持ちを切り替えてゆきました。もちろんファンのためには曲が生まれた背景やストーリーをセイインセイイ語りますが、実は音楽が出来上がってきたストーリーを上手に話すよりも、あまり関係ないのですが、たとえばそのレコーディングで起きたハプニングやその時期ずっと食べていたものやハマっていたものなどのサイドストーリーを話した方が興味を持ってもらえることに気づきました。

ここまで長くなりましたが、今になっても自分の気持ちを上手に説明するのはやはり難しいものです。どんなに注意深く話していても、どこかで必ず違和感を覚えて落胆することもあります。しかし内側の想いと外側へ伝えたい言葉の間にズレが生まれることが、また新たな言葉を巡る旅の始まりでもあり、曲をつくり詩を描く私をどこかへ運んでくれるのです。そして私は心からそこへ行ってみたいと思っております。外側の言葉と内側の言葉に揺られながら、移ろいゆくままに景色を眺めながら。

(藤巻亮太「言葉に揺られ移ろいながら」)

※ 刹那……きわめて短い時間。

※ プロセス……過程。

問一 波線部㉞㉟のうち、漢字は読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

- ㉞ オサ(まあって) ㉟ センデン ㊱ 生真面目 ㊲ 試(み) ㊳ セインセイイ

問二 傍線部①「言葉はもう一つの方法でも生まれてきたのかもしれない」について、次の(i)・(ii)の問いに答えなさい。

- (i) 「もう一つの方法」で生まれた言葉はどのような言葉か、本文中から十字以内で抜き出しなさい。(句読点、符号なども字数に数えます。以下同じ。)
- (ii) 一つ目の方法で生まれた言葉はどのような言葉か、本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問三 傍線部②「絶えず感情は言葉をはみ出していきます」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中から当てはまるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉を発した本人と、それを聞いた他の者とで、感情を表す言葉の解釈が異なるから。
- イ 価値観の変化によって言葉には、はやりすたりがありそれに感情が追いつかないから。
- ウ 瞬く間に移り変わる人の内面の複雑さ一つ一つに、言葉をあてはめるのは困難だから。
- エ 感情とは、言葉ではなく、あらゆる複雑な身体的動作によって表現できるものだから。

問四 傍線部③「悩みながら」とあるが、なぜ筆者は悩んだか。理由を説明しなさい。

問五 傍線部④「大切なのは必ずしも音楽自体を説明する必要はない」とあるが、筆者はなぜこのように考えるようになったのか。筆者の体験をもとに答えなさい。

問六 傍線部⑤「曲をつくり詩を描く私をどこかへ運んでくれる」とあるが、「私をどこかへ運んでくれる」とはどういうことか。説明しなさい。

令和四年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国語

(その二)

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そもそも、私が三田村さんに数学を教える仕事に就いたのは、十二月に入ってからすぐのことだった。

三者面談三日目の放課後。三田村さんからオファーがあった。

「オレに数学を教えてくれないか」

本館校舎と特別教室棟をつなぐ渡り廊下に私を引っ張っていった三田村くんは、めずらしく真顔だった。

クラスメイトとうつすら隔たって生きてきた私とて、目立つ生徒のことくらいは一応知っている。三田村くんは笑顔が「素」

と言われるくらい、いつだって笑いを振りまく存在で、女子にもかなり人気があるけれど、体育実技をのぞく成績のほうはさ

っぱりで、でもそんなところがまた愛されていたりする。それが、私を知る三田村くんだった。

「オレ、行きたい高校があるんだ。そこ、公立だけど陸上部はけっこう有名でさ。でも、いまのオレの成績じゃ、ほとんど

無理っぽい。だから、頼む。オレに数学を教えてくれ。な、頼むよ、綿森。とにかく数学をなんとかしなきゃ、話にならない

んだ」

「なんで？」

ほんとうは「なんで、私に頼むの？」とたずねたかったのだけれど、学校で人と口を利くことに慣れていない私の声は、

「なんで」のところですのでよれてしまつて、あとがつづかなかつた。

こういった、いざというときのタイオウのまずさが、「綿森さんって無愛想」とか「ちょっと怖くない？」というフウヒョウ

ウにつながるってしまうのだ、とわかっている。が、場数を踏めないのだから練習のしようがなく、成長は望むべくもない。

だけど、三田村くんは私のことばの足りなさを気にすることもなく、私が求めていた答えをあっさり口にした。

「綿森が、クラスでいちばん無駄なく、サクサク教えてくれそうだから」

その目があまりにまっすぐで、伝わってくるものがいっぱいありすぎて、気がついたら私はうなずいていた—という、ち

よつとうそになる。いや、かなりうそだし、それじゃあ少女マンガだ。

私は自慢じゃないが、「ひとり好き」というIDしか持たない女子中学生だ。

もちろん好きで手に入れたわけではなく、いつの間にか—たぶん、休み時間になると机に頬づえをついて、つまらなさそう

な顔で窓の外をながめたりしているうちに、「ひとり好き」という部類に入れられていた。

もうすこし過去にさかのぼって語るなら、私は小さいときからほかの人より、すこしばかりマイペースだったのだと思う。

幼稚園のころは、空を流れる雲ばかり見ていて、親や先生を心配させた。

小学生になると、レトロなつくりの学校に通っていたせいで、校舎のあちこちを見てまわること熱中してしまった。

黒光りする階段の手すりや、見たことがないほど小さなタイルが敷き詰められた手洗い場。講堂の、色ガラスがはめこまれ

た天窓と、そこから射しこむカラフルな光。

そういったものを飽かずながめてすごした。

そんなある日、Aまわりを見まわして、ひとりでトイレに行っているのは私だけじゃないか、と気づいた。クラスの多

くの子が知っていた愛美ちゃんの誕生日を知らないのも、女子では私だけだった。

ひとりで好きなことに浸っているうちに、完璧にスタートを失敗していた。いわゆる小学校デビューをしくじっていたのだ。

学年が上がっても、クラス替えがあっても、なんとなく同級生に近づけない、という感覚は消えなかった。B、からだ

が大きくなるにつれ、その感覚も強まっていった。それでも卒業式はやってきて、中学生になる日もやってきた。

令和四年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国語

(その四)

きやんきやんと、殺気立つまでにぎやかな一年B組の教室にはめこまれた日。

すこしくらいわらわれても、どこかのグループにもぐりこもう、と心に決めた。中学校デビューを狙ったのだ。

ところが、中身とちがって外見が老成しすぎていたせいかな、必死の形相で接近してしまったからか、磁石のS極とS極を近づけたときのような感觸でかわされまぐることとなる。部活でもすれば、と思いついたのは一学期も終わりかけのころで、そのころには「新生ウエルカム」の空気など、Cどこにもなかった。

こうして、中学校デビューを美しくじった私に与えられたのが、「ひとり好き」だった。もう雲にも手洗い場にも、なんの興味もなかったというのに。

それでも、なんだかんだと学校行事をやりすごしているうちに、二年生の二学期もあと一か月、になっていた。ここまでは、もういいや、だ。

^③こうなってしまったのは、もしかしたら小さいころのマイペースはまったく関係なくて、単に引込み思案だったからなのかもしれない。そのあたりを修正して、高校デビューこそしくじるまい。

なんてことをつらつらと、頬づえをついて遠い目をしながら考えるのも、かなり板についてしまっていた。

三田村くんが私に声をかけてきたのは、そんなときだった。

月、水、金の昼休み。

給食をなるべく早くすませて、理科準備室に集合。

勉強するのは数学。でも、テスト前はその限りではない。

とりあえず、契約期間は二年生のあいだ。

それが、十二月に私と三田村くんが交わした契約だった。

「でも悪いけど、勉強教えてもらっても、お札に金とか払うのは無理。だから、コロッケで勘弁して。オレがいるときなら、うちのコロッケ、好きだけ食っていいからさ。あ、もちろんメンチでもオーケーね」

そう言うと、三田村くんは両手をあわせて私を拝んだ。

「な、それでなんとかXを打ってくれないか」

「うちのコロッケって？」

「あ、うち、肉屋なの。知らなかった？ えーつ、知っててくれよ。駅の改札出て、右に曲がってちよつと行ったところにある『肉のミタムラ』って店。手づくりコロッケなんかも売ってんだ。揚げたてのキャベツメンチなんて絶品だぜ。汚い店だけど、モノはまちがいないからさ」

コロッケやメンチカツに惹かれたわけじゃない。

「内海は頭はよくても、他人のために自分の時間は使わないやつだろ。久野は、図書委員で昼休みはいいことが多いから頼めない。横山はいいやつだけど、ていねいすぎてイマイチ要領悪そうだし、名越なんて怖くて声かけられないし。健二に頼むのは悔しい。ありえない。絶対に途中でケンカになる。それから」

人選の経過を説明してくれる三田村くんを、私は茫然とみつめていた。

彼の分析は私でさえ、なるほど、と思うものだった。きつと、クラスのだれもが「そう、そう」と言うにちがいがなかった。たしかに、名越美可子なんてまったくもってありえない。

令和四年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国 語

(その五)

ということは一

さつき三田村くんが口にした「私を選んだ理由」は、だれもが納得するものだったことなのか。いちばん無駄なく、サクサク教えてくれそう。

④ なんだか、ちよつとよかった。

それだけの理由だった。私が三田村くんの申し出にうなずいたのは。

(香坂直「二月のプランクトン」)

問一 波線部㉞㉟のうち、漢字は読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

- ㉞ ナ(れて) ㉟ タイオウ ㊱ 無愛想 ㊲ フウヒョウ ㊳ 場数

問二 本文中の[A]と[C]に入る適当な言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を繰り返し用いてはなりません。)

- ア ぜひ イ もう ウ ふと エ むしろ オ すでに

問三 傍線部①「めずらしく真顔だった」とあるが、その理由を四十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「なんで、私に頼むの？」とあるが、「三田村くん」が「私」に頼んだ理由を本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 傍線部③「こうなってしまった」について、次の(i)・(ii)の問いに答えなさい。

(i) 「こうなってしまった」とはどのようなことか。三十字以内で説明しなさい。

(ii) 「私」が考えている、(i)のようなことになった理由として、適当ではないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」の見た目が大人びていたため。
イ 「私」が必死に皆に接近をしたため。
ウ 「私」は引っ込み思案であったため。
エ 「私」に皆が悪口を言ってきたため。

問六 [X]に入る漢字一文字を答えなさい。

問七 傍線部④「なんだか、ちよつとよかった」とあるが、「私」は何がよかったと考えているのか。適当ではないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三田村くんの「私」に対する評価が、誰しもが納得するような内容だと考えられたこと。
イ 「私」自身が気づけていなかった「私」の一面を三田村くんによって気づかされたこと。
ウ 「私」の三田村くんへの思いが伝わり、これから仲良くやっていけそうだと思ったこと。
エ 三田村くんが、目立たない存在の「私」をよく見てくれたことに気づかされたこと。